

コメント②

大学人として資料ネットの活動で重要と考えている点

大塚 英二

大学人として、資料ネットの活動で重要と考えていることを主に三つ挙げたいと思います。

多様な文化に関わる取り組みとの協働

一つ目は、大学では、生命や人間の存在をめぐる研究活動はもちろんですが、自然・社会・人文科学の諸側面から、非常に多くの文化面に関わる取り組みが多様に行われています。それらと協働して進める運動として位置付けて取り組むことが重要ではないかということです。

私の勤務する大学には学部が五つあります。看護学部と教育福祉学部では、命と生活の問題を軸に災害と向き合っており、実際にレスキュー活動に関わっています。東日本大震災のときには、当該学部の教員・学生が参加しています。外国語学部では、外国籍の人口が東京に次いで二番目という愛知県の特徴に対応して、災害時に外国人が混乱しないように、医療通訳を含めて易しい日本語の案内などさまざまな取り組みを実際にやっています。情報科学部では、ロボット情報工学技術を基に災害時の救出活動に技術的に関わっていくという方向性を目指しています。

では、私が属する日本文化学部（旧文学部）では被災とどのように関わっていくか。文学部のようなところだけが資料ネットに関わろうとすると非常に見が狭くなります。少なくとも専門性を活かして関わっていくということが大学人としては重要です。そして他学部、他領域の大学人と手を携えて運動を進めていく。そういう一環に位置付けたいということです。

人間が生きていくにはまず生命を守ることが最初ですが、健康で文化的な生活を送っていくために何が必要か。

人間らしい文化的な生活を送ることは憲法で認められた権利です。そういうところでわれわれの活動が十分にコミットしていけると思っています。災害から命を守る活動が最初に来ます。これは誰しもそうなります。その後、どのような時期にどのように資料ネットの活動に入っていくか。いろいろな経験もさることながら、看護・救命活動、その後のケアの活動をされている方々と連携を取り合って、私たちも実践的に学んでいく必要があると思っています。大学人が多く関わる組織の中では、そういう学部間の連携、横のつながりを重視して、資料ネットのあり方を構築していく必要があるだろうと考えています。そして、資料保全の重要性を前面に出しながら、大学人としてのアプローチのあり方を、今後工夫していく必要があると思っています。

地域との信頼関係

二つ目は、地域との信頼関係の持ち方です。これは非常に重要だというのは既に皆さんが指摘されているとおりで重複しますが、あえて述べたいと思います。大学、特に私の属する愛知県立大学などの公立大学は、地域連携、地域貢献を非常に求められています。この間、行政・地域とのつながりをかなり持ってきています。大学独自に地域連携センターを設置し、県はもちろん近隣の長久手市や瀬戸市、豊田市などの自治体と協働する事業をずいぶん行ってきました。そういうつながりを使って、資料ネットの活動についてあらかじめ周知しておくことが必要だと思っています。たくさんの方が文化事業や資料調査等を行っていくと思いますが、一緒に関わった方がいれば、そうした人脈を最大限に活用していく必要があると思います。災害を前提にすることを提案すると縁起が悪いと言う人

がいますが、そういうことに臆することなく、予想される危機の状況を説明し、やれること、やるべきことについて話し合う機会を設けておくことが今後は必要だと思えます。われわれは地域貢献をして災害前から信頼関係をつくり、そういうものを前提にして、災害の後は実践を通じて信頼関係をさらに強め、資料ネットの認知度を高める必要がある。そして、活動を恒常的なものにしていくことが求められるのではないかと考えています。

大学教育の生きた教材として

三つ目です。大学人としてはこの活動を社会的活動として行うと同時に、大学の教育の一環に組み込んで、まさに生きた教材として活用する。そういう教材として使う方向も考えるべきだと思います。学生にはさまざまな要求があつて、学ぶ意欲もそれぞれです。全員をこういう活動に向かわせることは困難であるかのように思われますが、実は学生はこうした実践、特に現物の資料と接することに飢えている。表現は悪いですが、私はそのように感じています。学芸員としての関わりとか、資料学と密接に関わる実践ですので、歴史学やそれに関わる専門課程を有している現場の教員は、それを教育の中にもどくように活かしていくかという点まで含めて考えてこういう運動をしていく必要があります。私は資料ネットの活動にあまり参加したことがなかったのですが、福島大学で今年の夏に行われた活動に参加して、そういう思いを強めました。これは後で阿部浩一先生の方から何かお話を頂ければと思っています。

資料ネットのこれからと大学

以上の三点を、資料ネットに関わる大学としての課題に掲げておきたいわけです。もちろん、資料ネットはわれわれ大学人のみが行うわけではありません。あくまでわれわれは呼び掛けを行って、やがてはNPO法人のような組織を作って活動する方法がありますが、そこに関わっていく大学人が在籍する大学での存在説明をするためにも、資料レスキュー・資料保全の意義を語るのに加えて、以上のような準備と対応が必要なのではないかと考えます。

本日のフォーラムは実質上の資料ネットの立ち上げと考えていますが、今後、組織をどのようなものにして、何をやっていくかは、この後、発起人等間で考えていきたいと思えます。すでに地域の大学では、資料レスキューの実際を学ぶワークショップが開かれています。本日も午前中、フォーラムの第一部で行われました。愛知県立大学も来月に勉強会を準備しています。そういう活動を各大学で展開して、組織的には定期的に集まって、被災した場合の対応マニュアルを準備する。動き出しをどうするか。事務局や代表をどうするか。資金面はどうするか。連絡網をどうするか。こういうものを決めていかななくてはいけない。たくさんありますが、これらを順次、固めていきたいと思えます。今日も斎藤善之さんや今津勝紀さんのお話でたくさんのことを学びましたので、そういうものを土台にして進めていきたいと考えています。

学生のボランティア活動について

最後に、学生ボランティアの件で最近気になることがあるので、これについて触れて、コメントを終わりたいと思います。若い人というか大学生は時間に余裕があるということで、その労働力を求める風潮が非常にあると思います。これは当然と言えば当然ですが、少し認識を改めるべきところもあると思っています。学生の本分は何かというと、もちろん勉強して教育を受けることです。その上でのボランティアのはずで、ボランティアが教育上、大いに効果があるのであれば、それは一石二鳥です。しかし、大学人として学生を危険な所へ直ちに派遣することはできないという状況があります。災害初期はプロの対応が必要です。その育成を組織的に行うべきであり、学生をすぐに動員しようという単純な発想は危険だと思います。これはいろいろ話を聞いたことがあるのです。学生には消防団にすぐに入ってもらって、先頭に立ってやってほしいというようなことを少し聞いたことがあります。地域住民として消防団活動をするのはいいのですが、単純な労働力として捉えられては困ると思っています。

私どもが直接、指導に関わっている学生にとつて、いろいろな面、特に教育面を考慮すると資料ネットは最適なものであると考えていて、そういう形で捉えていきたいと考えています。

(おおつか・えいじ 東海歴史資料保全ネットワーク、愛知県立大学日本文化学部)